

主人公は、自分に対して罰する思いでいると思う。遠回しにルロイのことを聞いていた自分に腹が立っていると思う。自分を罰せず、神様を罰する思いなら、死んだのが分かったときに人差し指を交差すればいいと思う。でも、身体中が悪いことを知ったときに交差をさせたことから、ストレートに聞けなかった自分など、いろいろな自分を罰さないといけないと思っただと思う。

主人公は、自分に対して「おまえは悪い子だ」と罰する思いでいると思いましたが。駅の改札口での最後の最後で、ルロイ先生は病気なんだと分かっていたのに、それでも本当か確かめるために、死に関することを聞いてしまつて、今まで自分をお世話してくれ、本当に大切に育ててくれたのに、最後はお礼の言葉も言わず、ルロイ先生に死について聞いてしまったので、自分は悪い子だと思っている。それと、自分のことを「自分は悪い子だ」と言わずに、「おまえ」と言っているの、自分のことを「自分」と優しい感じじゃなくて、「おまえ」と自分を見放すように言っている。「知らぬ間に」とあるので、自分自身に対する後悔や怒りが大きかった。

主人公は、自分に対して「おまえは悪い子だ」と罰する思いでいる。一週間前であつていて、しかも余命も残りわずかだと言うことまで言っていないが、一緒にオムレツ食べて、たわいもないような思ひ出話をして、ルロイ修道士は今がいつとう楽しいと言っていたけど、何もできなかった自分や握手しかできない自分が悔しくて打ち付けていると思う。

それでも、個人としては、「私」は必死に聞くのか迷っていたし、考えた結果、初めて「私」がルロイ修道士と面会したときに「心配するな」という思ひの「握手」をするという行動をしつかりとやりきつたので、今は亡き人もきちんと伝えることができていると思う。

主人公は、みんなが愛したルロイ先生を連れていった神に対して「よくも先生を連れて行きやがって」という思いで、「おまえは悪い子だ」と罰する思いでいる。しかし、声に出さず、両手の人差し指を交差させたのは、ルロイ先生が神を、または天国を信じていたから。ルロイ先生の最後を台無しにさせないために、落ち着いてルロイ先生の言っていた言葉を信じた。（ルロイ先生が天国にいるなら、神からルロイにお仕置きなどが行き、先生に対して迷惑をかけることになるから。）

主人公は、神様に対して「おまえは悪い子だ」と罰する思いでいる。理由は、ルロイ先生は、敗戦国の人々のために働いてくれる優しい人で、主人公はもつと長く生きてほしい、どうしてこんなに心が温かい人なのに、神様はルロイ先生を死なせてしまったのかと、とても切なく、寂しい気持ちでいっぱいである。それに、ルロイ先生は、何十年と神様を信じ続けてきたのに死んでしまったから、主人公は神様が憎い。裏切られたような気持ちである。

葉桜

花が散って、若葉の出はじめた桜。《季 夏》



「葉桜」と「桜」